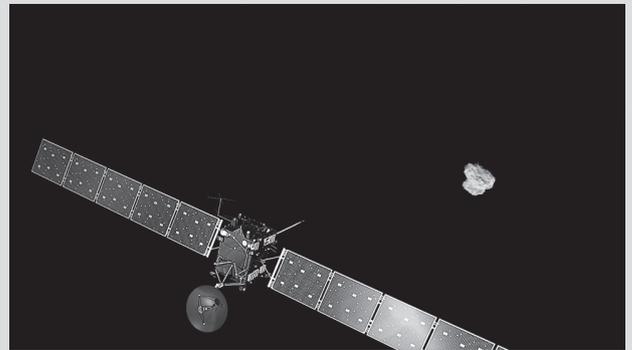


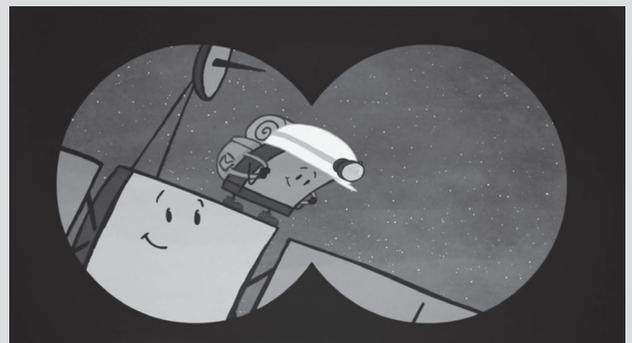
Ambition the film

疲れてやる気がなくなった時、忙しすぎて逆に何も手につかない時、少し時間を取って観る短い映像があります。タイトルは『Ambition the film』。2014年の映像ですが、今も力を貰えます。



ESAの彗星探査機ロゼッタ

Credit: Spacecraft: ESA/ATG medialab; Comet image: ESA/Rosetta/NAV-CAM

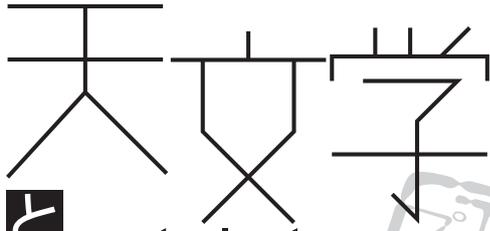


Once upon a timeに登場するロゼッタ(下)と着陸機フィラエ(上)
Credit: ESA

ています。

ロゼッタの広報映像としては、ロゼッタと着陸機フィラエをかわいらしくデフォルメした9本のアニメからなる“Once upon a time”シリーズも秀逸で、ぜひ見ていただきたい作品です。彗星到着や様々な探査、フィラエの着陸、そして探査の終了など、節目節目に公開されてきました。ロゼッタは最終的には彗星にハードランディングしてそのミッションを終えるわけですが、このアニメシリーズの最終回には、Ambition the filmの登場人物たちがアニメで登場し、彗星表面で眠りについたロゼッタを宇宙船の窓から見るシーンが出てきます。このタイトルは日本語で言えば「むかしむかし、あるところに」ということになるわけで、2年間かけて公開されてきたAmbition the filmもOnce upon a timeも一貫して「未来から過去のロゼッタミッションを振り返る」という構成であったことを気づかされて、ここで伏線を回収するかと清々しい悔しさを与えてくれます。

アルマ望遠鏡からは素晴らしい成果が次々発表されてプレスリリース準備に忙殺されたり日常的な広報業務に追われたりと、場当たり的になりがち。こういうストーリー性を持った魅力ある見せ方を考えていかなきゃな、と言い聞かせながらもう一度Ambition the filmを見ることにします。



と www.tenpla.net

プラネタリウム

vol.
204

高梨直紘 (東京大学) / ☆ 平松正顕 (国立天文台)

皆様、改めましてこんにちは。天プラを20年近く前に(!)高梨さんと一緒に立ち上げた、平松です。奇数月号の担当です。今や私の天プラとしての活動はこのコラムを書くことくらいですが、今後ともよろしくお願いします。

さて、皆さんYouTubeはご覧になりますか? YouTubeに行って、「Ambition the film ESA」と検索して出てくる6分半ほどの映像を見てみてください。英語なので、字幕機能をONにしたうえで自動翻訳→日本語を選ぶと、何とか意味の分かる日本語にしてくれます。

ご覧になりましたでしょうか?映画「ゲーム・オブ・スローンズ」や「ボヘミアン・ラプソディ」に出演したアイルランド出身の俳優アイダン・ギレンが「導師」役として登場するこの映像を作ったのは、ヨーロッパ宇宙機関ESA。ESAが2004年に打ち上げた彗星探査機ロゼッタが、探査対象であるチュリュモフ・ゲラシメンコ彗星に到着する3週間ほど前の2014年10月下旬に公開した、ロゼッタ計画の広報映像です。遠い未来の世界で、魔術とも思えるような技を練習する若い女性と導師が対話する中で、「生命にとって最も重要なものは?」「水。」という会話から、地球に水をもたらしたのではないかと考えられている彗星、そしてその彗星に初めて着陸を行った探査機ロゼッタが紹介されます。「(女性)ロゼッタのあとにもより大きなミッションがあったはず」「(導師)そうだ、でもその最初がロゼッタだった」と、未来から過去のミッションを振り返る構成になっています。「(導師)探査は、なんのために?」「(女性)知識。」「(導師)それもあるが、何が私たちにとって可能であることを示すことも目指していたのだ」など、単に探査ミッションを紹介するだけでなく、なぜミッションを実行する必要があるのかなど、より根源的なところも訴えかける内容になっています。

探査機による太陽系天体探査には何年もかかるのが普通ですが、なかでもロゼッタは、打ち上げから彗星到着までに10年も飛行を続けなくてはいけなかったミッションでした。その間、一般の方の関心をつなぎとめること、そしていよいよ到着が目前に迫ったタイミングで社会の機運を高めることが課題だったと関係者から伺いました。それにしても、本格的な映画の予告編のようなこの映像を作ったのはやっぱりすごい。

私は、なんだかやる気が起きないときにこの映像を見ると、少し力をもらえます。特殊な人間だと我ながら思いますが、アルマ望遠鏡の広報担当を務めている私にとっては、プロジェクトの広報でここまでのクオリティのものが作れるんだ、作っていいんだ、と勇気を与えてくれると同時に少し悔しい気持ちも与えてくれる作品です。初めて見た時には、いろいろな気持ちがごちゃ混ぜになって涙が出そうになったことも覚え